

虎に関する図と俗習の文化検討

陶 思炎[※]

一、俗習例説

虎図、虎習俗は中国民間文化体系の中で最もよく見られる象徴的な符号であり、文化人類学の考查対象として、具体的な、感じられる形で神話信仰と生活追求、彼岸の世界と現実世界、自然存在と人類社会、宗教的感情と習俗祭礼を結び付けている。外観になる図と行為には深い意味が隠されているため、神秘に見える所が多い。

中国古代では、虎図と虎習俗は厄除けの呪物として、お墓とか、建築物及び服飾、器具などによく使われ、お墓と建築物を守護し、身を守る機能を果たしている。

虎図から見れば、お墓に使われる例が多い。河南省濮陽仰韶文化遺跡で発見された虎模様と竜模様は新石器時代の文化遺跡であり、後世の虎形墓画の起源でもある。商の時代の墓の中に石と玉で作られた虎が発見され、安陽の商代の墓から発掘された石虎は頭を上げて、口を開け、大きい歯を見せて、とても威厳と神秘に満ちている。漢の時代に入ると、お墓の中にいくつかの種類の虎図が見られるようになった。走る虎、戦う虎、二虎図がそれである。北魏時代の棺桶の上に虎の頭とか、虎が人を食う等の場面が描かれており、その意味はとても神秘的である。漢の時代では、「墓の前に柏を植え、墓地の道端に石虎を置く」という墓制を形成し、明の時代に至って、石虎は墓を守る獣として、帝王と将相のお墓の前に立っている。

虎図は居室、服飾、器具などにも使われて、民間でたくさんの面白い習俗を形成している。現在、江南の農村では、住宅の玄関の上によく虎頭八牌が掛けてあり、ドアに向くように掛ける「中堂画」も虎を描いてある画を選んでいる。ドア或いは壁に住宅を鎮める虎図を貼って道教の符を加える。農家の赤ちゃんは生まれて一ヶ月になると、虎帽子を被り、虎くつを履く。昼間に虎靴を被ったり、夜になると虎枕を使う子もいる。虎図は子どものお守りだけではなく、大人のお守りでもある。漢の時代の衣服に使うボタンはよく虎の形に彫られており、その厄払いの機能を期待している。銅鏡は結婚儀礼に使う物ではあるが、その上にも虎の模様が見られる。昔の婚姻儀礼の中に新婦が新居に入る時、たくさんの厄払いの儀礼があって、桃の弓、柳の矢、或いは米など、それに係わる道具を新居の周りの中、或いはベットの上に置いて、鎮めものにする。東漢の銅鏡には歯と虎を描いており、それは複数の吉祥物により、銅鏡の厄払いの機能を期待する。この銅鏡は新婦のお守りであり、人々の婚姻平安への祝福でもある。

歳時の民俗の中では、端午の節句にも虎文化の要素が見られる。端午になると、人々は家に菖蒲と艾草を掛けるが、菖蒲は形が剣に似て、鬼を殺せるし、艾草の形は虎の爪に似て、厄を避けられると信じているからである。南京の婦人は端午の節句になると毛布生地で作られた虎模様の

※中国・東南大学東方文化研究所長

花を挿す習慣がある。雄黄酒を飲む時、またこの酒を使って子どもの額に「王」字を書いたりして、虎子にする。この類の虎模様の遊びと使用は虎が鬼を駆除でき、身を守ることができると思われているからである。習俗の中の虎図は単なる自然界の猛獣ではなく、固定社会の中に継続されている文化符号である。機能が明確化されている象徴として、物質的、精神的また社会的な多重属性を持っている。

二、虎紋探求

虎模様の神秘的、象徴的な意味は上古神話から見なければならぬ。中国の度朔山神話と西王母神話の中にはその姿が見られる。王充「論・訂鬼篇」の中に「山海経」を引用して：

海の中に度朔山がある。山中に大きな桃の木があり、3千里に渡る。その東北方面を鬼門と言ひ、鬼の衆の出入り口である。また二人の神がおり、神荼と昆弟と呼ばれて、鬼を管理する。悪鬼があれば、縛って虎に食べさせる。

その他に「乱竜篇」の中ではこう記述されている：

上古には神荼と昆弟の二人がおり、鬼を管轄できる。東海の度朔山に住んで、桃の木の下に立ち、鬼を管理する。鬼はわるいことをしたら、縛って虎に食べさせる。

度朔山の中には虎が悪い鬼を食べる獣であり、「鬼門」を守る鎮めものである。古今の虎紋の応用はこの神話に示された考えと似ていて、神話空間の模倣である。つまり、虎紋を使って鬼を脅かす場面を創造して、悪払いの心理満足を得る。

西王母神話も虎と関係がある。虎は神話要素として、この神の構成部分であり、その神性と意味を問う入り口でもある。「山海経・西次三経」の中にはこう記載している：

玉山は西王母のいる所である。西王母は人の姿であるが、豹尾と虎の歯があり、よく叫ぶ。髪がバサバサで、力が強い。

また「大荒西経」ではこう書かれている：

西海の南、流砂の濱で、赤水の後ろと黒水の前に崑崙之丘と呼ばれる大きい山がある。そこに神があり、人面獣身である。その下に淵があり、外に火の山がある。西王母というものがあひ、虎の歯と豹の尻尾で、穴に住む。

上述の神話の中に西王母は「虎の歯」、「虎の身」、「よく叫ぶ」、「穴に住む」などの特徴があるが、人と獣の合体する西方大神である。西方は日の暮れる所であり、死の方向である。だから、西王母の虎歯、虎身は鬼気を鎮めるための武器である。西王母は生死を管理する神だから、虎の姿の使用は彼女の威厳と怪異を強調するだけでなく、死との関係及び鬼を鎮める力も表している。

この意味については、私たちは古代の「四神」の中にある西方白虎からも見られる。青竜、朱雀、白虎、玄武は東南西北の神であり、その配置は獣体宇宙神話を基礎にしている。青竜は東で、陽の気を示し、朱雀は南で、太陽鳥が真ん中を運行している。白虎は西で、昼間が去り、夜が来、陽が衰弱して、陰が強くなる。玄武は北で、光のない幽冥世界の象徴となっている。

西方の神はなぜ白虎になるのか？これは太陽が東から登り、西に暮れることに対する思考であ

る。東は日が出る場所であり、光明と温暖に満ち、人と野獣の活動する時間であり、命の活躍である。西は日の暮れる所で、黒暗と寒冷の場で、人と野獣は活動できなく、死の意味を帯びている。西方は白昼と黒暗の境界地であり、生死の交替地帯でもあるから、虎をもって鎮め、その境界性を表している。色彩から見れば、東の青は生命の始まりで、南の朱は生命の旺盛で、西の白は生命の衰弱で、北の玄は冥界の幽暗を表している。生命の転換は方位から見れば、西と北の連続地で、色は白と黒の交替地である。民間信仰の中にある人の魂をとる無常鬼は白と黒であり、白と会うのは吉で、黒と会うのは凶だという。彼らはよく人々が死ぬ時に来て、その命を取っていく。白と黒が一緒に、生死転換の意味がある。アメリカのある地方の死の神も白と黒の二者一体であり、表わす意味は生と死の移行である。だから、白虎の白い色と西方にある配置は死亡の迫りと死を迎えることを意味している。或いは白虎はその門戸であり、冥界の関門とも言える。

虎口を地獄の入り口と見るのは世界的な文化現象である。昔の人はよく山の中の洞窟と虎口を「鬼門関」（地獄の入り口）に思うが、洞窟と虎腹の暗さと恐怖が他界の空間と死の恐怖を感じさせるのである。古代ギリシアは地獄の入り口が Eleusis に近い所にあり、もう一つが **Tenarum** の山の中にある洞窟だと思っていた。古代ローマ人及び中世紀のヨーロッパ人も洞窟を地獄に繋がる入り口だと考えた。これらの洞窟には最初は虎の頭とか皮の模様が飾られていた。例えばインドの **Udayagiri-Hill** の洞窟は死者の遺体を安置する所であり、入り口の岩石は大きい虎の頭に彫られて、入り口は虎口のようになって、地獄の入り口及び生と死の境界線を意味している。中国四川省宜賓県石城山の人岩墓群の中にも同じような彫刻が見られる。目のような穴が二つあり、さらにその下に口のような穴がある。口は前に突っ込んで、全体的に虎の頭のように見える。インドの虎洞窟と同じ信仰の働きが見える。

ヨーロッパ中世紀の教会は地獄を表現するために使う木彫刻が大きな口を開けている虎の頭であり、口の中に憂鬱な幽霊たちが見える。そのほか、中世紀の絵が表現しようとする地獄の情況も虎が亡くなる人の魂を食う場面からの発想である。中国山西省大同市で発掘された北石棺の上に同じような絵が描かれている。虎は大きな口を開けて、その中に二人の少女がいる。彼女は虎の歯を握って少しの怖さもない。この絵から、生と死が決まりがあると言う信仰と魂を鎮めて棺を守る機能を表わしている。世界文化史の中のこの現象は比較文化研究に課題を残している。これらの現象は或いは平行する存在であり、或いは相互の模倣と再現である。その機能は生と死を分けて、人を守り、鬼を鎮めることであり、生命への熱愛を表わしている。

中国民間の虎紋の応用は度朔山、西王母などの神話信仰と潜在的な繋がりがある。度朔山は亡くなった人の魂が住む「鬼島」であり、鬼を食う虎は地獄門戸の象徴符号である。西王母の「虎歯」と「虎身」は四神の白虎と似ており、さらにその位置は西方にある。西は昼との交替地であり、昔の人はこれによって、生と死の変換及び人間界と冥界の繋がりと理解しているし、虎は西方に居ることは二界の関門の標識になり、同時に鬼を鎮める機能も与えられている。古代及び現在の風俗に見られる虎紋の応用は、虎が鬼を食う信仰により、見守りと長寿を求めることに理由がある。虎は威厳があり、人も動物も食べるし、虎の口は生死の場であり、陰陽界であるから、

人々の地獄に対する連想を誘っている。

三、文化思考

虎図、虎習俗はよく見られる民俗背景として、totem意識の遺留ではなく、少なくともtotemの影響による表現ではない。それは生死観、他界観の表現であり、人類学と民俗学の視点から見れば、人類の思考体系と獣体宇宙モデルシステムに関する情報である。

虎図にはよく歯で虎口の怖さを強調したり、或いは歯の模様を全体的な装飾に使う。歯の使用は、外在的な効果が虎の威厳を強調することにあるが、内面に隠れている機能は再生の観念と命の力である。歯は民間信仰の中では生命の種であり、身を守る宝として、厄除け以外に再生と更新の意味も含まれている。

「釈名・釈形体」の中にこう書いている。「歯、始まりである。」「雅・釈詁」の中にも「歯、寿なり」と書いている。「説文解字」の注釈は「児童の歯が落ちて、新しく出るのは寿の兆であり」としている。これらの解釈はすべて歯を人の寿命と関連させている。文化的な理解から言えば、歯は生命の存在の象徴となっている。幼児の歯替わりの折、上の歯を屋根に、下の歯を床に入れる習慣がある。つまり、歯を以て宅を鎮め、土地を守り、生命の力を獲得して、死亡を避ける。虎図の上に歯を装飾にして、墓に使う時、魂を鎮めて往生させる意味であり、銅鏡などの日用品に使う時、厄除けと長寿を祝福する意味があり、鎮めものから吉祥物への中間となっている。

虎と竜の配置は原始文化に遡れる。その墓制における応用は方位確認、生死転換、体を守るなどの信仰が含まれている。竜がよく飛ぶのに対して、虎は伏せるし、竜は体を伸ばし、虎は隠れるから、古代の人々は神が伸びて、鬼が隠れると信じる。漢の時代の王充は「論・論死編」の中に「神なる物は伸びて、終がない」と論じている。こうして、竜と虎はまた「始」と「終」の象徴的な意味を持ち、再生と復活の聖なる物となっている。竜と虎のこういう動と静、始と終、伸と屈、生と死の対立から、民間では「竜虎戦」の風俗もあった。また、雨乞いの行事の中では、虎の骨を糸で縛って竜に投げ込む方法もある。この方法の基礎は虎が出たら、竜が必ず出て戦う観念である。雨と旱魃の転換、旱魃を終わらせて、雨が降る期待が含まれている。

虎と壁が同じ図にあることは、中国古代の墓葬絵の中に、双竜以外に、他の動物が壁を守る信仰を表わしている。壁は天を祭る器具であり、天門の象徴でもある。虎口が開けて、壁に向けるのは二虎が天門を守り、魂を天国まで送る意味を表われている。この意味から言えば、虎と竜は形が違うが、質は同じで、魂を天国に導いて、新生させる機能がある。

虎図、虎風俗の中では、虎紋、虎事が威厳があるが、残酷ではない。伝統的な虎図の文化意味は図だけではなく、主にその応用に表わしている。虎の習俗は虎図の存在価値と象徴意味を決めるとも言える。民俗的な雰囲気になかったら、虎図は機能不明の芸術作品になり、人類学と歴史学からの研究意味がなくなる。この意味から言えば、虎図を研究するには虎習俗から見なければいけないし、物象から事象へ、事象から心象への軌道にそってこそ、この文化形態の真の意味がわかる。